〈論　説〉

アジア大環状文化圏（1）
――ネパールと日本（3.1）――

明　石　博　行

東西両洋の歴史は、それを深く研究すればするほど、おどろくほどの類似性をその根底にもつことを発見するものなのである。歴史の研究はなによりも、従来なおざりにされてきた、この種の平行現象の探求からはじめなければならない。

（宮崎市定『大唐帝国』より）

はじめに

ネパールと日本に関する論考として、最初に、「二度のネパール訪問を終えて：ネパールと日本（1）」（以下、「ネパールと日本（1）」または「2009年の論考［2009年稿］」と略）[1] を公表した。長期にわたる中断ののち、続稿として「『ネパールと日本』再考」[2] を（2.1）と（2.2）に分割するかたちで公表（以下それぞれ、「ネパールと日本（2.1）」、「ネパールと日本（2.2）」と略）し、関連する断片的な小稿なども書いてきた[3]。「ネパールと日本（2.1）」では、「アジア大環状文化圏」

---

1)　拙稿「二度のネパール訪問を終えて：ネパールと日本（1）」、『駒大経営研究』第41巻第1号、2009年。

2)　拙稿「『ネパールと日本』再考：ネパールと日本（2.1）」、『駒大経営研究』第49巻第1・2号、2018年3月。同「『ネパールと日本』再考：ネパールと日本（2.2）」、『駒大経営研究』第49巻第1・2号。

3)　「2013年度の在外研究と2014年の補足調査を終えて」、駒澤大学『学園通信』314号、2014年、所収。「ルンビニでのある思い出から」、『駒澤大学経営学部創立50周年記念誌』、2020年、所収。

認識の考察を深めることが遅延の一要因となったことを指摘するとともに、「ネパールと日本（2.2）」の末尾において、「次稿では、すでに一定の言及をした『アジア大環状文化圏』に関する考察に立ち入ることになろう」と記した。

この間、基礎的な理論やミレニアム転換に関わる取組み[4]もあって、アジア大環状文化圏に関する論稿をすぐにまとめることはできなかった。アジア大環状文化圏に関する研究は、部分的にはすでにかなりの著作でなされている。けれども、その総体を視野に入れた分析は、まだ行われたことがない。

本稿では、「『ネパールと日本』再考」における「アジア大環状文化圏」の概括をふまえて、この文化圏の端緒的形成を論ずるための準備的な考察に取り組むことにする[5]。概括にとどめざるをえないが、アジア大環状文化圏の形成史を論ずるための前提を整理することにしよう。

1　アジア大環状文化圏

巨大文化圏としてのアジア大環状文化圏

ここでアジア大環状文化圏というのは、物質的・精神的な紐帯をもち、一定の共通する文化的特性をもつ、現代中国の内周と外周に位置する多様な国や地域の複合体である。ここにはチベット自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区、台湾といった中国の核心的地域も含まれている。しかし、それだけにはとどまらない。中国の内周に位置する南方の雲南省・四川省・江西省、北方の黒竜江省といった、多くの地域も含まれる。

---

4)　さしあたり、拙稿「経済社会学序説（1）」、『駒澤大學経営學部研究紀要』第52巻、2023年3月、参照。同「経済社会学序説（2）」を本号に掲載する予定であったが、その掲載は見合わせることにした。

5)　「ネパールと日本」の（2.1）と（2.2）は、不充分な記述にとどまっており、多くの補足を加えなければならない。また、その一部は訂正をしなければならない部分を含んでいる。杉勇の論稿に関する言及については、川村喜一の論稿との混乱が含まれており、訂正を要する。原稿に削除と補正を加える過程で混乱が生じ、その誤りに気づいたのは最終校正を終えてからであった。一部の人には、抜き刷りをお渡しするさい、そのことを伝えた。適切な時期に訂正と補足を加えることにする。

中央アジアでは、アフガニスタンなどとともに、旧ソ連領に属していたウズベキスタン・キルギスタン・トルクメニスタン・タジキスタンなどの西トルキスタン諸国が含まれる。南アジアでは、パキスタンやインドの北西部と北東部を含み、バングラデシュ・ネパール・ブータンなども含まれている。

ASEAN 諸国も、この文化圏との結びつきをもっている。いずれも中国やインドの影響を色濃く受けており、中国文明の影響を比較的強く受けた東南アジアと、インド文明の影響を比較的強く受けてきた南東アジアとの、ある程度の性格的な差異をふまえておく必要がある。東アジアでは、日本や韓国がここに含まれることはいうまでもない。北朝鮮もこの文化圏に含まれる。視野をさらに広げるならば、南シベリアの一定の地域ないし圏域も、この文化圏との結びつきをもっている。

このように、アジア大環状文化圏とよぶこの文化圏には、きわめて多様な地域や国家が含まれている。ユーラシア大陸には、ヨーロッパとロシアを除くアジア地域だけでも、きわめて多くの独立国家がある。旧ソ連の解体は、中央アジアの諸国がこの文化圏との強い結びつきをもっていることを再認識させる契機となった。またネアンデルタール人たちの居住域の影響がサピエンスにも継承されていったことなどをふまえると、この文化圏は、中央アジアだけでなく、ウクライナや旧東欧諸国の歴史とも深い結びつきをもつ。

のちに論ずるように、広大なアジア地域の全体を視野に含むならば、この大環状文化圏をふまえないかぎり、アジア全体の文明史や文化史を語ることはできないであろう。東西とか南北とかの移動や交流を通じた関係は、きわめて重要な意義をもつ。しかし、さまざまな交易路や教えの道と結びついた大きな環状文化圏としての歴史を、さらに深く探求してゆくことが求められている。

この大環状文化圏は、アジアからみてさらに東、あるいはヨーロッパからみて西に位置する環太平洋文化圏とよべる文化圏とも結びつき、交錯しあっている。ただ、大環状文化圏としての歴史の新旧を考えると、環太平洋文化圏の歴史は比較的新しいといえる。これらふたつの文化圏の交錯はきわめて重要な意義をもっているが、ここではアジア大環状文化圏の考察に限定する。

アジア大環状文化圏の地域と圏域

いま紹介した概要からわかるように、アジア大環状文化圏は、その内部にさまざまな地域や国々を含む巨大な圏域である。けれども、この文化圏が形成される過程では、きわめて古い時代からの人々の移動と交流の歴史が、深く関与してきた。したがって、個々の国や地域を越えた文化的な結びつきの探求がこの文化圏理解には求められる。生産様式とともに、広義の交通様式を視野に入れないかぎり、このアジア大環状文化圏を理解することはできない[6)]。

古代以来の東西交流と南北交流の歴史が絡み合いながらこの文化圏は形成されたのであり、古代文明の形成と発展そして衰亡の歴史をめぐる地域ごとの絡み合いは、きわめて重要な意義をもっている。中石器時代と新石器時代という時代認識は日本ではあまり使われなくなっているが、この文化圏の起源は、旧石器時代とされてきた出アフリカ後のサピエンス史の初期の時代にまで遡ることができる。

サピエンスたちが、西アジアから中央アジアやシベリア方面にまで定住域ないし半定住域を拡大し、朝鮮半島および南方と北方からの日本列島への移住が基本的に完了した時点をもって、この大環状文化圏の成立期とみなすことができる。それはおおむね、4万年（現在確定されているかぎりでは3万8000年前）から3万5000年前までのあいだとみることができよう。この文化圏の形成期については、続稿においてあらためて論じることにする。

日本列島は、環太平洋文化圏とアジア大環状文化圏とが交錯する位置にある。似たような位置には、韓国やシンガポール、独立国ではないが台湾、さらにはインドネシアやベトナムなども含まれている。また、それぞれの圏域ないし地域には、中小の環状文化圏の存在が絡み合っている。さらに、それらの環状文化圏には、古代から続くペルシア文明とイラン文明、インド文明、中国文明など、巨大文明圏の興亡の歴史が重なり合って影響を与えてきた。

---

6)　アジア大環状文化圏を理解するためには、生産様式と交通様式に関する基礎理論をふまえなければならない。体系的な解説ではないが、生産様式と交通様式の統一的な理解については、さしあたり、『駒大経営研究』第49巻第1・2号、2018年、所収の、拙稿「生産様式理論の再構築のために」と「Verkehr 再考」を参照されたい。

2　アジア大環状文化圏の基本特性

アジア大環状文化圏の特性

このような複合的かつ重層的な歴史の過程を経たことによって、アジア大環状文化圏の文化的諸相には、三大特性ないし四大特性というべき基本的な性格が形成された。この文化圏は、(1) 多様性、(2) 雑種性、(3) 辺境性、といった基本性格をもつ。この地域が多様性に富み、雑種的であるのは、巨大な文明圏の辺境に位置づけられ、大国の動向に翻弄されることが多かったからでもある。したがって、(4) 分断性、という特性も、個々の地域ごとの歴史の過程で刻みこまれた。分断されて、相互に対立するという歴史を、この文化圏は内包してきたのであった。

しかし、これらの基本性格は、この文化圏を特徴づける共通性でもある。この地域はまた、分断されて対立ばかりしてきたわけではない。この文化圏の諸地域は、石器時代から連綿と続く交易路によって結ばれてきた。その歴史のなかには文明の中心地として巨大な帝国を築いた歴史も多く含まれている。

古代には極寒のシベリアや中国からヨーロッパにまで影響を及ぼした匈奴（ションヌゥまたはフォンヌー）の大帝国があった。チャンドラグプタ（在位前317 - 前296頃）によって創始され、アショーカ王（在位前268- 前232頃）が第3代の大王となった古代インドのマウリヤ朝や、カニシカ王（在位130年 - 170年頃）に最盛期を迎えたクシャーナ朝も、この文化圏が発祥の地となっていた。

中世になると、モンゴルの大帝国が形成される前に、金・西夏・西遼・チベット・大理などが広大な地域をそれぞれ分割するかたちで統治し、この文化圏は、これらの大国を文化圏として結ぶものとなっていた。イスラーム帝国の興亡も、この地域の歴史に大きな影響を与えた。中欧アジアにイスラーム圏の影響力が広がるとともに、北部から中部にかけては、チンギス・ハーン（在位1206-27）によって、モンゴルの大帝国が形成されていった。モンゴル帝国の拡大とイスラーム圏の拡大はこの時期に同時進行し、イラン・トルコ方面のイル・ハーン国、南ロシア方面のキプチャク・ハーン国、中央アジアのチャガタイ・ハーン国などのイスラー

ム教系のモンゴル諸帝国がこの文化圏に大きな影響を及ぼすようになった。

フビライ・ハーン（在位1260-94）が大都（現北京）に都を定めた元王朝は、チベットや高麗を属国とし、イル・ハーン国などのモンゴル系諸国をも抱合するかたちで大帝国を形づくった。大理国などはこのとき元王朝の版図に組み込まれ、中国の一部としての性格を強めていった。けれども、この大環状文化圏の結びつきが断ち切られたわけではなく、交易網を通じた文化的な繋がりは、この地域の雑種的性格を強めるかたちで、より堅固なものとなっていった。

インドでは、現在のアフガニスタンからアッサムやバングラデシュ、南はデカン高原にまで広がるムガール帝国（1526-1858）が形成された。また、満州族によって1616年に築かれた清国によってモンゴル高原と中国本土へとその支配が拡張され、中国の清王朝（1644-1912）が形成された。ムガール帝国も清朝も、アジア大環状文化圏に属する国家が拡張してゆくことによって築かれた。19世紀から20世紀にかけて近代には、日本による大日本帝国の勃興が図られたが、やがて潰えていった。

これらの巨大帝国の興亡の歴史は、同時に、その支配下にあった中小の民族国家や国家形成にまで至らなかった小地域や小民族の悲劇をともなうものであった。このアジア大環状文化圏は、その全体を統一する権力体系によって形づくられることなく、多様な権力体系が重なり合い、地域的特性の多様さが拡大されるかたちで、文化的な多様性と雑種性を保持しながら文化的な統合性を形づくっていった。

アジア大環状文化圏の多様性と雑種性

アジア大環状文化圏の文化的な三大特性ないし四大特性について、いま少し解説を加えておこう。便宜上、(1) の多様性と (2) の雑種性については、本項で記述する。(3) の辺境性、および (4) の分断性については、次項で記述することにしよう。

少し観察するだけでも、この地域が多様なものの複合体であり、多様性に富んでいることはすぐにわかる。第1に、この地域は地理的にきわめて広大であ

るから、その自然条件はきわめて多様であった。地域ごとの資源も気候も、それぞれ大きく異なっている。時代によって利用する資源は異なるが、食料や鉱物資源に恵まれた地域もあれば、資源らしい資源に恵まれなかった地域もある。地球規模で気候は変動するが、同じ時代でも、地域ごとの気候条件は大きく異なっている。極寒の地もあれば、酷熱にさらされる熱帯の地も、温暖な地や亜熱帯の地もある。雨があまり降らない土地や茫漠たる砂漠もある。点在するオアシスや牧草に恵まれた広々とした大地もある。水資源が乏しかったり恵まれなかったりする地域もあるけれど、大雨などで大洪水に見舞われる地域もある。適度な雨や雪が降るような地、大小の河川や湖や沼沢地に恵まれた地、大海に面していたり囲まれていたりする地もある。世界に冠たる高峰が連なる山岳地帯もあれば、大小の高原地帯もある。広狭さまざまな低地の平野部もある。

したがって第2に、それぞれの地域によって、植物相や動物相も大きく異なる。緑豊かな草原もあれば、広大な熱帯雨林に覆われた地域、常緑の照葉樹林帯もあるし、針葉樹林帯が延々と続く地域もある。植物がほとんど生えない高山や荒地もある。砂漠のオアシスもあれば、高地の草原もあれば、低地の沼地や湖や海の植生に恵まれた地域もある。

こうした気候や植物相の多様性は、そこに生息する動物たちの多様性とも結びつく。それぞれの地域に、大小さまざまな生物が生息していた。太古にはマンモスやナウマン象のような大型獣もいた。一部のゾウのような動物を別とすれば、大型獣の多くは狩り尽くされてしまった。しかし、中小の哺乳動物は狩り尽くされることなく、その一部は飼育動物となっていった。オオカミの一部が飼育されてイヌとなり、イノシシの一部もブタと化した。野生種のヤギやヒツジ、ウシやウマやヤクなどの飼育化も進み、家畜化されていった。

第3に、この地域の全体をひとつの文明圏に統一するような巨大帝国は形成されなかった。この地域は、ひとつの文明圏に統一される地理的限界をはるかに超えていた[7)]。この文化圏がきわめて広大で多様な地域に及ぶものであるた

---

7)　フェルナン・ブローデルは、（浜名優美訳『地中海Ⅱ-1』、藤原書店、2004）において、フェルナン・フリードの「古代ローマ時代の『世界』経済の空間は、最良の輸送手段

め、古代の匈奴もそうであったし、中世の大モンゴル帝国でさえ、この巨大な文化圏の一定部分を支配したにすぎなかった。この地域の全体を支配する巨大帝国は存在せず、周辺の大文明圏の興亡の影響を受けた地域変貌の歴史が、この地域を彩ってきた。

中華文明ないし中国文明との関係としてみるならば、この地域は長期にわたって北狄・西戎・南蛮・東夷といった蛮族の支配地域とみなされていた。はるか西方のメソポタミアやエジプトの古代文明、そしてギリシア文明の影響もこの地域に及んだ。アケメネス朝ペルシア帝国の一部となっていた地域もここには含まれており、古代ペルシア文明の影響を受けた地域は広い範囲に及んでいる。この文化圏の南部では、古代インド文明の盛衰も大きな影響を及ぼしていた。

こうした自然条件の多様性は、それぞれの地域で生活を営む人々の共同体や、人々が従事する産業や組織の多様性を生む。この地域は、きわめて多様な生産様式と交通様式を、同時代に併存させながら、相互の交通関係を進化させた。この文化圏を構成してきた人々は、同じサピエンスではあるけれども、言語も生業も、人種や民族も多様であった。

したがって、それぞれの地域や圏域ごとに、その生活様式はきわめて多様なものとならざるをえなかった。多彩な民族の興亡と変容がこの地域全体の歴史を彩ってきた。この文化圏の全体がひとつの文明圏であるとか、民族的統一体であるとみなされるような歴史は形づくられたことがなかった。人の移動と交易を通じた物の移動がこの文化圏の全体を結びつける紐帯となっていた。

このような多様な特性をもつ地域が種々の道によって繋がり、相互の交通関係をもつならば、そこに雑種性という性格が生まれるのは当然である。地域環境の多様性、民族的な多様性、産業の多様性は、みなあいまって生活様式の多様性をこの地域にもたらした。この大環状文化圏を結びつけ、その文化的特性

を用いれば、およそ四〇ないし六〇日で駆け巡ることができる」という記述をひき、おおよその程度としては、16世紀の地中海は「相変わらず『ローマ』時代の規模であり、16世紀の地中海だけが「〈必要な変更を加えれば〉1939年の世界全体に一致している」と記している。アジア大環状文化圏全体の規模は、40日から60日で駆け巡れる世界の経済空間の規模をはるかに超えるものであった。（同訳書、39ページ、参照）

を育んだものは、人と物の移動による交通であった。いうまでもなく、この交通は、ドイツ語の Verkehr に対応するきわめて広い意味での交通である。

第4に、ミレニアム転換期に至るまで、この地域の全体が支配的な生産様式で統一されたことはなかった。この地域の広大さは、自然環境の大きな差違をその産業構造に、したがって生産様式に与え続けた。この地域にも農業地域はあったが、すべての農業地域で小麦や米のような穀物栽培が可能だったわけではない。マメ類やイモ類の栽培を延々と続けた地域も少なくない。一方、さしたる雨も降らず、強力な灌漑施設も構築できなかった地域では、牧畜が主たる生業であり続けた。牧畜業と農耕業とくに穀物生産業とでは、その生産様式の特性は大きく異なってこざるをえない。

生産様式の異質性は、文化的な異質性をもたらす。騎馬遊牧民系の文化と農耕民の文化が大きく異なるのは当然である。そこに金属や宝石などの天然資源の採掘、金属の精錬や加工をめぐるさまざまな工業的生産様式の差異が重なってくる。文明期の特質をなす都市と村落との分離と結びついて、階級構造や階層構造の差違も生まれる。そのうえに太古からの狩猟や漁労を主たる生業とする民衆の文化や農工業者たちの文化などが入り混じることになる。これらの生産交通様式と結びついた生活様式、したがって文化的な差異の組み合わせや歴史的な変化の速度も、地域ごとに異なってこざるをえない。この広大な文化圏のそれぞれの地域ごとの文化的特性が多様なものとなるのは必然的なことだったのである。

生産様式と生活様式の多様性が社会存立の前提となり、それを広い意味での交通が結びつけてきた地域、それがこのアジア大環状文化圏であった。東西の広がりも、南北の広がりもまことに巨大なこの文化圏は、緯度も経度も高度も異なる平地・山地・高峰・砂漠等の地域差がまことに大きく、気候も違えば、植物相も動物相も異なっている。全球的資本制社会の影響がこの地に及ぶまでは、この地域的な特性の多様性は、この文化圏における特定の生産様式や生活様式の統一を不可能なものとした。

このような多様な文化的特性をもつ諸地域が交易などで結びついたり、その

一部が特定の文明圏に編入されたりするならば、そこにさまざまな文化的雑種性が生ずるのは当然である。しかも、この地域の交易圏は、出アフリカ後のサピエンス社会が中央アジアから南アジアそして東アジアへと広がっていった時代から、古代文明の形成期に至るまで、連綿として形づくられ、重ねあわされていったのであり、その交易網は広大な地域にはりめぐらされていた。

ラピスラズリを産出するアフガニスタンは、交易を通じて古代のメソポタミアやエジプトの文明と結びついていた。古代のアッシリア帝国やアケメネス朝ペルシア帝国の文明と文化も、この文化圏の西側に大きな影響を与えた。アレキサンダー大王による征服ののちには、ヘレニズムの文化も影響を及ぼした。中華帝国の統一支配が強まり、その影響がこの文化圏にまで及べば、中華文明の影響を強く受けた。古代から連綿と続くインドの文明と文化の影響を強く受けもした。

仏教などの伝播は、この地域の文明と文化にきわめて大きな影響を与えた。しかし、種々の宗教とその伝播も多様であり、雑種的であった。ペルシア帝国が滅びても、ヘレニズム文化を介したギリシア文明やイラン文明は、宗教イデオロギーも含め、この地に影響を与えた。キリスト教も、マニ教に媒介されるかたちも含めてこの文化圏に大きな影響を与えた。

この文化圏とその周辺域に、ソグド人たちの文明と文化は大きな影響を及ぼした。古代の匈奴とか月氏の帝国も大きな足跡を残した。イスラーム帝国の興隆がこの文化圏に大きな影響を与えたことも、いうまでもない。さらに、中世のモンゴル帝国の支配と結びついた文化も大きな影響をもたらした。

アジア大環状文化圏の辺境性と分断性

すでに述べたことからも明らかなように、このアジア大環状文化圏は、周辺の巨大な文明圏の外部に属しているか、中心地から離れた外部に近い地域に属していた。したがって、巨大な文明圏からみれば、この地は辺境の地とみなされるのは当然のことであった。この環状文化圏は、古代、中世、近世、近代の歴史を通じて、巨大文明圏の辺境に位置するという性格を強く帯びざるをえなかったのである。

これらの地域の全体を包摂するような大帝国は歴史的に存在せず、この文化圏の外部に存在していた巨大な文明国家ないし帝国の辺境に、この圏域の多くの地域は位置づけられてきた。古代中国の秦漢帝国がこの文化圏の諸国・諸地域を北狄・西戎・南蛮・東夷といった野蛮人が居住する地域とみなしていたことは、その象徴といえる。この地域は古代の中華文明圏の外にある文化圏だったのであり、その一部が中国の拡大とともに中国内部あるいは中国圏の一部としての性格を強く帯びるようになった。

この環状文化圏では、その北部、西部、南部、東部を問わず、それらの一角をなしていた特定の地域が一時的な大帝国の中心地となった。古代の匈奴の帝国のように、巨大な帝国を築いた歴史もある。しかし、古代の秦漢帝国の地域や唐帝国の支配地域をも包摂するに至った中世のモンゴル帝国ですら、この大環状文化圏のすべての地域は統合できなかった。

正確な用語とはいえないが、歴史学派の用語から派生して現在でも多くの歴史家が使っている「世界帝国」というものを考えてみると、このアジア大環状文化圏はそれらの「世界帝国」の周辺として位置づけられてきたという性格がある。この地域は古代のペルシア帝国の一部となっていた地域もあり、古代ペルシアやそれを部分的に継承したイスラーム帝国などの文明と文化の影響も、この地域は大きく受けた。同様のことは、古代インドの帝国と文明についてもいえる。中世のイスラーム帝国とその文明は、とりわけその西部と南部の地域に大きな影響を与えた。

けれども、いかなる帝国も、この文化圏の総体を包摂できず、環状文化圏全体を支配する帝国とはなりえなかった。古代の匈奴帝国は、漢の帝国と絶えざる死闘を繰り返し、その勢力を弱めていった。中世のモンゴル帝国は、中国の元朝として中華帝国の領域をその一部に組みこんだ。しかし、フビライが築いた元の帝国は、大きくはイスラーム圏に属するようになった他のモンゴル帝国を経済的に懐柔しながら支配するにとどまった。このアジア大環状文化圏の一定の地域は、元帝国の辺境に位置するイスラーム圏としての性格をもち続けた。

多様性や雑種性、そして辺境性というこの文化圏の特質は、相互の分断を激

化させる要因として作用した。中国の清朝が、ウイグル民族の支配地域をその支配領域に組みこんだことは、中華帝国の拡大という性格を併せもっていた。しかしそれは、この大環状文化圏の別の一領域を支配していた女真族（満州族）の支配領域の拡大という基本性格をもっていた。それは中華世界の拡大としてのみ捉えるべきものではない。同様のことは、チベットやモンゴルの帝国についてもいえる。

多様性・辺境性・雑種性を貫く共通性

多様性や辺境性、そして雑種性は、このアジア大環状文化圏の差異性と分断性を特徴づけるものである。しかし、それらの差異性は同時にこの文化圏の全体を特徴づける共通性でもある。多様性と辺境性は必然的にその雑種性を生みだした。そのハイブリッド的性格の発展とともに、分断性を越えてゆく共通性が形づくられてきた。古代の中華文明、インド文明、ペルシア文明などのあとをついで興亡を繰り返した巨大文明圏の中心圏域とは異なる、雑種的な共通性をもつのである。

これらの文化的特性を生んだのは、生産様式の統一性ではなかった。この地域にサピエンスたちの生産様式はきわめて多様だったのであり、生産様式に規定される生産力と生産関係もきわめて多様であった。前資本制社会においては、この地域を全体として統合するような文明社会は形成されなかった。全球的資本制社会が形成され、確立されるまで、その文化的な態様とその共通性に大きな影響を与えたものは交通様式であった。

その多様性や辺境性と結びついた分断性は、交通様式による結びつきをもち、雑種化・ハイブリッド化によって文化的な共通性を形づくってきた。さまざまな地域ごとに異なる生産様式と地域的伝統をもつこの文化圏の諸社会は、一定の交通様式によって結合されていた。人の往来と物の交易によって、多様な地域は結びつけられていた。「道」によって、これらの広大な地域は結びついてきたのである。

商業活動をともなう交易路でもあったその道は、古代から陸路と海路によって、この広大な文化圏に属する個々の地域を結びつけていた。北方から中央ア

ジアに抜ける道は、のちに「シルクロード」とよばれるようになり、広く知られるようになった。南側にはかつて「西南夷道」などとよばれた道があったが、いまだにその詳細はつかめない。西南夷道はまた、現在のネパールや北インドとも通じており、それはインドと中央アジアをつなぐ「ウッタラ・パーサ（北の道）」と重なっていた。しかし、その詳細はまだ充分にわかっていない。

このような交易路・商業路は、同時にさまざまな教えが伝わってゆく教えの道でもあった。その教えのなかでも、古代から連綿として続いてきた仏教の伝統は、特別な紐帯としての意義をもっている。その内部に大乗仏教や密教などの多様な宗派や学派の分裂を含みながら、仏教はこのアジア大環状文化圏の全体を結びつける思想的紐帯となった。それはこの文化圏を、古代から中世にかけてのペルシア、インドそして中国で形づくられた巨大な諸帝国と結びつけるものでもあった。

イスラームの諸帝国とその宗教思想がそのうえに加わった。さらに、近代思想のなかでも、さまざまな様相を帯びた社会主義と民主主義をめぐる政治的・社会的思想が、この地域において特別な意義をもつようにもなった。

これらの宗教思想を含む教義や学説については、ここでは立ち入らない。別の機会に、それらに関する特別の言及をすることになろう。ここでの中心論点は、このアジア大環状文化圏の端緒が、いつ、どのようなかたちで形成されたのかについての論究である。それを論ずるためにはいささか回り道をしなければならない。すでに示唆したように、これは経済社会学序説の枠組みのもとに論じたほうがよい課題である。しかし、この問題をあらかじめ論じておかなければ、アジア大環状文化圏の起源をめぐる問題は究明できない。以下、この回り道に立ち入ることにしよう。

3　アジア大環状文化圏を結ぶ道

アジア大環状文化圏とシルクロード

アジア大環状文化圏には、異質な生産様式をもつ大国や中小国を結ぶ多様な

道が形づくられてきた。アジア大環状文化圏は、さまざまな道で結ばれることによって、一定の共通性をもつ文化圏として、その形成が図られてきた。したがって、この文化圏を理解するためには、その文化を形成していった歴史的な特殊性と多様な文化圏を結ぶ道に着目しなければならない。

この文化圏を結ぶ道は、東西の巨大帝国を結ぶ道の一部でもあった。それらはまた、南北の大国や小国を結ぶ道とも繋がっていた。つまり、東西南北にわたって、この文化圏の領域をはるかに超えるユーラシア大陸のまたがる広大な領域を結ぶ道の一部が、この文化圏を形成するときにも重要性をもっていた。アジア大環状文化圏を結ぶ道は、その内側に位置する中国ないし中華帝国と、この文化圏の外部に属するさまざまや帝国や小国を、東西南北にわたって結びつける巨大な面としての広がりをもっていた。

この文化圏を結ぶ道は、しばしばシルクロードとよばれてきた。よく知られているように、シルクロードは、ドイツのフェルディナンド・フォン・リヒトホーフェン（1833-1905）が「ザイデンシュトラーセン Seidenstraßen」と名づけた東西の交易路の英訳名である。イギリスのオーレル・スタイン（1862-1943）が、この道を「シルクロード」とよんで、新たな知見を加えた。日本語で「絹の道」、中国語で「糸綢之路」と訳されることもある。現在では、英語のシルクロードという言葉が広く使われている。

もとは中国とローマを結ぶ東西交易路を概括する言葉だったのだが、シルクロードは、多くの人々を惹きつける言葉として広く流布し、その拡張解釈がなされるようになった。その結果、シルクロードは、当初の用語法からはるかにかけ離れた、さまざまな分野で論じられるものとなった。いま少し、このシルクロード認識の変容を追ってみることにしよう。

シルクロード認識の拡張

東西の陸路として認識されるようになったシルクロードは、日本列島に連なる道へと拡張された。やがて海洋にも広げられ、「海のシルクロード」という言葉も、よく使われるようになった。中国南部の茶馬古道なども、シルクロード

とよばれるようになった。東西交易路に限定すべきではなく、南北関係を含む「面」として捉えるべきだとする学説も現われ、地域ないし圏域の概念を含むかたちにまで、シルクロードという名称の拡張解釈がなされるようになった。さらに、現代中国の「一帯一路」のような構想も派生するようにもなった。

その研究史は日本史でもあり、中国史でもあり、またアジア大環状文化圏史とも重なっている。詳細な学説史的系譜に立ち入る必要はないが、その経緯を少しふまえておいたほうがよかろう。

「海のシルクロード」という呼称は、日本人が創った言葉らしい。基本的には、この言葉は、三杉隆敏（1929-）の造語とされてきた[8)]。「陶器の道」などとよばれていた海上の交易路の別称として、このシルクロードという言葉はよく使われるようになった。いまでは、「陶器の道」などというよりも、「海のシルクロード」という言葉のほうがよく使われているのかもしれない。

「茶馬古道」とよばれてきたきわめて古い時代からある交易路も、「もうひとつのシルクロード」とか、「西南シルクロード」とよばれるようになった。茶馬古道は、中国の雲南省が大理国であった時代より前からあったと考えられる、現在の雲南省でとれた茶をチベットに運んだ古道である。この茶馬古道を含む中国南西部の交易路を「南西のシルクロード」と名づけたのは、中

---

8)　森安孝夫によれば、松田壽男博士は「アジア史全体にまで目を向けて優れた概説書をいくつも著した」が、「そこでは『海洋の道』までがシルクロードに含まれるようになり、今ではその主張が学会の定説となった」（『シルクロードと唐帝国』、講談社学術文庫、66-67ページ参照）。三杉隆敏『海のシルクロードを調べる辞典』、芙蓉書房出版、2006年、によると、『海のシルクロード』という名称を最初に使った本は、同氏の『海のシルクロードを求めて』（1968年）であった。1966年に、海路西に向かって出発し、寄港した港の地殻の遺跡を見て回ると、「あちらこちらから中国陶器の完器や破片」が見つかった。「東西交流の代名詞として、『（陸の）シルクロード』はよく知られていたが、同じように海上にもシルクロードがあったのではないかと思い、朝日新聞社の友人、榊原昭二氏にレポートを送った。『シルクロードが東西交流を指す言葉であるのならば、どこに行っても中国の焼き物は現れてくる。確かに海の上にもシルクロードはありました』。これが「海のシルク・ロードを訪れて」というタイトルで（月曜サロン）のコーナーで三回にわたって掲載された。これがきっかけとなり、『海のシルクロード』という言葉が普及していった」。同書はこのような経緯を紹介している（16-17ページ参照）。

国の研究者だったらしい。その研究は「第七次五か年計画」(1986-90年）の哲学社会科学の重点課題のひとつとなった、「一帯一路」構想の端緒がここで形成されたといえよう。その動向は、李家正文（1909-1998）による1987年11月21日付の中国通信新華社の記事で紹介と論評などを通じて、日本でも注目されるようになっていた[9)]。その後、「もう一つのシルクロード」としての茶馬古道は、NHKの特集番組などで報道されたこともあり、日本でも広く知られるようになっている。

さらに、「シルクロードとは決して『線』ではなく、『面』である」といった拡張解釈がなされるようにもなった[10)]。森安孝夫によれば、シルクロードには「どうしても東西交渉というイメージがつきまとう」が、「ネットワークとして理解」すれば「南北の視点も大事」であり、シルクロードは「東西南北を網の目のように結ぶ交易ルートである」。そこでは「世界中の価値ある特産品、例えば絹織物・金銀器・ガラス・香料・薬品・毛皮はじめ……ありとあらゆる商品が行き交った」。それは「あくまで、東西南北交易ネットワークの代名詞であり、いわば雅称に過ぎない」。

シルクロードという言葉を拡張解釈すれば「東西南北交易ネットワークの代名詞」と理解できるという指摘は、間違ってはいない。名称というものは、異なる定義を与えれば、いくらでも変形できるからである。また、「道」という日

---

9)　西南夷道に関する先駆的な研究者のひとりであった李家正文は、『東アジア史の謎』、泰流社、1989年、で、以下の一文を含む新華社の報道を紹介していた。「シルクロードといえば古都長安（西安）を起点に…ローマに至るものを想像するが、中国南西部に紀元前四世紀にすでに存在し、全長約三千キロに達する南西のシルクロードがあった。…四川大学の李教授が立証したもので、同教授によると、南西のシルクロードは、紀元前二世紀後半に張騫が西域に派遣されたころすでに発見されていた。南西のシルクロードは四川省成都を起点として、雅安・涼山を通じ雲南省徳宏ダイ族ジンボー族自治州を経てビルマ・インドに通じていた。全長約三千キロ、中国南西部の二十余りの少数民族の居住地を通過し、沿道にはたくさんの城壁・遺跡・文物が今日まで残され、南西のシルクロードが極めて繁栄した時代があったことを示している」（同書251-252ページ）。

10)　森安孝夫『興亡の世界史第05巻 シルクロードと唐帝国』、講談社、2007年、（同文庫版、2016年）。とくに、第1章の「東西南北のネットワーク」および「シルクロード貿易の本質」を参照されたい。

本語や中国語には地域ないし圏域という意味があることをふまえるならば、シルクロードのそのような拡張解釈も不可能ではない。日本語でも「北海道」というようにいまでも「道」という言葉を地域ないし領域という意味で使っているし、古代に畿内以外の西海道・南海道・山陽道・山陰道・北陸道・東海道・東山道などは古代道路の名称を含む地域区分の名称であった。これは古代中国の地域区分から派生したものであって、韓半島や日本もその影響を受けてきた。

古代インドの「パーサ」にも、「交易路」というときの「路」の意味とともに、北インドのかなり広い領域の名称としての意味が含まれていた。玄奘がインドの「中国」として認識した地域は、古代インド圏ではウッタラ・パーサに属する領域であった。マウリヤ朝のような一時期を除くと、それは広大な古代インドの中心地とは必ずしもいえなかった。インド的な伝統のなかでは、ウッタラ・パーサはむしろ、疎外された、特殊な地域とみなされていた。

茶馬古道は、古代中国の漢の時代には、「西南夷道」という、実態のよくわからない交易路の一部でもあった。たしかに、中国語の「道」という語は、一定の地域ないし領域を示すものでもある。けれども、本来的には、西南夷道を含む交易路としての道の究明と、その歴史的な意義の明確化が、アジア大環状文化圏を理解するにあたっては重要な意義をもつものとなろう[11)]。

シルクロード論の意義

シルクロードという交易路認識には、またその拡張解釈にも、大きな意義があった。まず、シルクロードをめぐる歴史を掘り下げるなかで、シルクロードとそれを取り巻く地域の、永きにわたって軽視され、ときに忘れられてきた歴

---

11) ここでは、古代インドのウッタラ・パーサや西南夷道の研究には深入りできない。その究明には、欧米や日本のみならず、インドやネパール、中国、旧ソ連やロシアや中央アジア諸国の研究成果をふまえる必要がある。比較的最近の加藤九祚『シルクロードの古代都市：アムダリア遺跡の旅』、岩波新書、2013年、で紹介されている諸文献、とくにペテルブルグの出版社から刊行されたルトヴェラーゼの『大インドの道』で研究された、インドとメソポタミアと中央アジアを結ぶ道などを視野に入れなければならない。

史が、あらためて明らかにされた。歴史の事実認識にとどまらず、さまざまな謎をはらむその歴史は、小説やテレビ番組の題材ともなり、多くの人々を魅了してきた。歴史認識の深化を通して、相互理解を深めてゆく契機がそれによって形づくられてきた。

また、それは中央アジアの独自の意義を明らかにするのに寄与した。中央アジアの歴史は、19世紀まで、欧米の研究者たちもあまりその考察を深めることができずにいた。けれども、20世紀になって、リヒトホーフェンやスタインによって中央アジアの探検と発掘が進み、多くの新たな知見が得られるようになると、中央アジア史への注目度は高まっていった。日本の大谷探検隊の果した役割も大きかった。

中央アジアの歴史をめぐっては、旧ソ連やロシア革命前の考古学者や歴史家たちが、一世紀以上前から重要な成果を輩出してきていた。20世紀には、それらの多くは日本で紹介されることも少なく、専門家以外の人々にはあまり知られることがなかったといってよかろう。しかし、シルクロード史の研究は、サピエンス史と東西交流史における中央アジアの重要性を再認識させるうえで、たいへん重要な役割を果たしたてきたし、いまも果たしている。

それは東西交通をめぐる相互の密接な依存関係を明らかにすることによって、アジアとヨーロッパとの相互理解と親和性を深める役割を果たした。中国の「一帯一路」の構想は、いろいろな批判もあるけれども、ヨーロッパでも、中央アジアでも、そして日本でも、一定の評価を得てきた。スリランカの国家破産の原因ともなったことなどをふまえると、そのすべてを是認できるわけではない。けれども、その構想の具体化が地域間そして圏域間の結びつきを強固なものとしてきた意義は、積極的に評価してもよいであろう。

要するに、シルクロードをめぐる研究は、東西交通の結びつきの意義の認識を深め、それは現実の政策展開にも反映された。それらの点をふまえるならば、シルクロードの新しい定義は、それぞれ一定の意義をもつといってよい。それらは、海路の重要性を指摘することによっても、南北関係を含む面にも留意してそれらの道の総体を捉えることによっても、シルクロードとの結びつきをもつ地域への

理解を深めたといえる。それらは一定の意義をもっていたし、現在でももっている。

シルクロード認識の限界

日本の研究者たちも深くかかわってきた、さまざまな新しいシルクロードの認識は、それぞれ意義をもつものであったけれども、それらは種々の問題を内包するものでもあった。そのような問題を認識するならば、シルクロードという名称をただ受け継ぎ、それを拡張解釈してゆくという方向は、このまま続けるべきではないように思う。

第1に、シルクロードの拡張解釈は、理論認識上の制約をもっていた。もともとのシルクロードの理解は、東西交易の重要性の認識に基礎をおくものであり、交通の重要性に関する認識を深めるものであった。しかし、シルクロードの意味内容をあまりに拡張してゆくと、それぞれの地域や圏域がもつ、生産様式と交通様式の統一的な理解に混乱が生ずることになる。とくに、面としての広大な地域ないし圏域にシルクロード認識を広げてゆくならば、それぞれの地域ごとにきわめて多彩な様相を帯びる生産様式と交通様式の統一的な理解が不明確になってゆく、という制約性が顕在化してくることになろう。

第2に、シルクロードの遠隔地交易という性格に焦点を絞りすぎるようになると、それはアジア大環状文化圏を結ぶ交通路の重要な意義を見失ってしまいがちになる。シルクロードの一部ともなったさまざまな道は、もともと交換関係を含む必需品交易の道[12]であるとともに、通婚圏を結ぶ道であった。それらの近距離の道ないし路がもっていた歴史的な意義が見失われてしまうのである。

東西交易路としてのシルクロードには、比較的短距離のさまざまな必需品交

---

[12] 念のために解説を加えておくと、ここでは、市場での「交換」よりも広い概念として「交易」という用語を使っている。交換は基本的に市場関係としての物のやりとりだが、交易関係は贈与経済の関係と市場での交換関係の両者を含んでいる。贈り贈られるという贈与の関係は、対等の関係としても起こりうる。しかし、一方的な贈与が貢納だが、貢納とその見返りとしての下賜という関係も交易には欠かせない重要な要素であった。贈与経済の原理は、市場での交換関係を支配する原理と異なる性格をもっている。贈与経済と市場経済とのあいだには重なり合う領域もあるが、概念的に、両者は区別しなければならない。

易の道が、結びついていた。その総体はきわめて複雑な道の繋がりをもつ。必需品にはさまざまものがあるけれども、なかでも塩は、きわめて重要な意義をもっていた[13)]。塩なしには、人も動物たちも生きてゆけない。しかし、塩のない地域というものはいたるところにある。したがって、塩のない地域の共同体と塩を産出する共同体とのあいだの交易路は、出アフリカ後のサピエンスたちの拡散と定住に不可欠なものであった。

そのような比較的短路の必需品交易の道は、通婚圏を結ぶ道としても重要な意義をもっていた。通婚圏というものは、それほど広い領域には広がりえるものではなかった。必需品の比較的日常的な交易がなされることを通じて、サピエンスたちの通婚圏も広がっていった。必需品の交易と結びついた人的な結合が形づくられなければ、婚姻関係を通じた人的結合関係は形成しにくい。遠隔地交易の拠点に広がりとともに、通婚圏もある程度までは広がる。けれども、通婚圏には、民族的な、あるいは共同体間の共感なしには、あまり広がりえないという性格がある。サピエンスたちの通婚圏は、ネアンデルタール人たちの通婚圏よりもかなり広い範囲に広がったといえようが、その広がりにはおのずと制約があったはずである[14)]。

---

13)　ここでは言及するだけにとどめるが、塩は重要な商品貨幣でもあった。生活に欠かせない必需品としての塩は、同時に交換を媒介する貨幣としても機能した。仏教の戒律が僧侶たちに塩の所有を認めたことは、仏教を奉ずる僧たちを堕落に導く端緒となった。

14)　仏典の記述には、この通婚圏に関する興味深い記述がいくつもある。なかでもよく知られているものとしては、ブッダの両親の結婚をめぐる物語りであり、またシッダールタ太子の生誕をめぐる物語りがある。シッダールタ太子の誕生は、父方のシャカ族のカピラヴァストゥ国の首都と母方のコーリヤ族の首都デーヴァダハとは通婚関係の結果であった。カピラヴァストゥがネパールのティラウラコット遺跡であることはほぼ確実で、旧コーリヤ国の遺跡も訪ねたことがあるけれども、両者はたいへん近い距離にある。一説にはカピラヴァストゥ国は千葉県ほどであったという説があるくらいで（杉本卓洲『インド仏塔の研究―仏塔崇拝の生成と基盤―』、平楽寺書店、1984年、参照）、ローヒーニー川をはさんだ隣国がデーヴァダハとはネパール内の近隣郡の関係であった。シッダールタ太子が誕生したとき、母のマヤ夫人は実家に帰る途中で太子を生んだ。両国は歩いて相互の交通ができる範囲にあり、その途中にあったのが、太子生誕の地であるネパールのルンビニ園である。中村元も書いているように、シャカ族とコーリヤ族という「両種族のあいだには昔から婚姻が盛んに行なわれたらしい」

必需品交易の道は、比較的短いものでよかった。しかし、それらの必需品交易の道はしだいに複雑化し、遠路との結びつきをもつようになった。それらの必需品交易の道は、通婚圏を結ぶ道ともなった。人と人とが交換を含む交易を通じて接すれば、特定地域の狭い共同体の枠を超える人的な結びつきができる。その結びつきが通婚圏の広がりをもたらす。通婚もまた、広い意味の交通の重要な要素となる。

交易を通じた移動のみならず、一定の地域に定住していた人々が移住していった道としても、それらの必需品交易の道や婚姻の道は重要な役割を担っていた。移住にさいしては、一定の情報をすでに得られている地域、できれば血縁的な結びつきのある関係者のいる地域のほうが移動しやすい。それは今も昔も変わらない。

比較的短い必需品交易の路や通婚圏を結ぶ路は、さらに一定の地域での定住にゆき詰まった人々が移住してゆくときに通る道ともなっていったであろう。人の移動が頻繁になれば、それらの道はやがて、遠隔地交易の道としての意義を担うようにもなる。そのような道の代表的な存在が、のちにシルクロードのなかに組み込まれていった天山北路と天山南路であり、南のほうでは茶馬古道であった。

とはいえ、それらは東西の長距離交易路としてのシルクロードが形成される以前から、交易や婚姻の道としてきわめて重要な意義をもっていたことに留意する必要がある。そもそもの起源からいえば、そのような必需品交易と結びついた通婚圏の道がしだいにつながることによって、アジア大環状文化圏の基礎は形づくられていった。移住が少しずつ積み重ねられることによって、血縁的な地域間の結びつきや、文化的な地域的結びつきが形づくられ、文化的な共通性や民族的な結びつきを固定することにもなっていった。こうした歴史の積み

（『中村元選集決定版第11巻 ゴータ・マブッダⅠ』、1997年、45ページ）。というよりも、ほぼ確実に両者は通婚圏としての関係をもっていた。通婚圏というのは、やはり限定された地域が結びついた圏域なのであり、そのようなものとして重視をする必要がある。通婚圏を長距離交易圏に埋没させることは、歴史認識を曇らせることになろう。

重ねによって、中華文明からみた辺境の地に、円環上の文化的な共通性が形づくられ、環状文化圏が形成されていったのだといえよう。

第3に、シルクロードの面としての広がりを強調しすぎるならば、特定の地域と地域とを結ぶ多様な交易路の意義を見失いがちになる。もともと東西交易の代表的商品から名づけられた名称を、他のさまざまな商品の交易路の名称に転用してゆくということは、それぞれの道ないし路がもっていた意義を見失わせることになる。地中海文化圏と中国文化圏あるいはインド文化圏を結ぶ遠隔地交易をシルクロードとしてのみ捉えると、きわめて重要な地域的な産物の交易がもっていた意義は、かえって見失しなわれてしまうのである。

そもそも、陸路と海路は違う。塩の道は近隣の狭い道を必要とするけれども、貴重な陶器や香辛料を運ぶ道は、安全で広い道が必要となる。陸路での運搬は困難で、海路を利用しなければならない品々も多くある。さまざまな交易品の種類が異なれば、それらを運ぶ道も多様化する。それらの多様な商品を運ぶ道をすべてシルクロードとして括ってしまうことはできない。

当然のことだが、生活圏のなかで必要とされる財の交易を介した結びつきも、通婚圏との結びつきや、交易路を介して伝えられてゆく教えの内容も、それぞれの地域ごとに大きな差違があった。運ばれる交易品も、行き交い、移住してゆく人々も、それぞれの道なり路によって、共通性とともに差異性をもっていた。そのようなきわめて多様な性格をもつさまざまな道や路が、複合的かつ重層的に結びつくことによって、アジア大環状文化圏は結ばれていた。そうした複合的で重層的な交易路の全体と個々の組み合わせや関連性を丁寧にみてゆくことが、これからのアジア大環状文化圏を認識するためには必要なことなのではなかろうか。

さらに一言しておくならば、第4に、リヒトホーフェンによって「ザイデン・シュトゥラーセン」と名づけられたシルクロードは、東西を結ぶ陸路の名称であったという、そもそもの由来を尊重することも必要であろう。

ドイツ語のシュトラーセには、「町」というような意味もある。けれども、英語の street に対応する「道路」「大通り」「街道」といった意味が、その基本的な意味内容をなしている。リヒトホーフェンもスタインも、東西交易の陸路を念

頭においてこの言葉を使っていた。それは陸の街道であって、海路ではなかった。まして面としての地域や圏域を意味するものでもなかった。

同じ言葉を拡張解釈して意味を付加してゆくことも、ある一定の範囲では許されよう。しかし、シルクロードという言葉が形づくられた歴史をふまえ、そのもともとの意味を尊重することも、研究のひとつの在り方として重要なのではなかろうか。

多様な道の再認識

ヨーロッパやアジアにおけるサピエンス史は、アフリカ大陸との結びつきを前提として形づくられた。出アフリカ後のサピエンスたちが、アラビア半島を介してヨーロッパやアジアに広がっていったとき、そこにはすでにネアンデルタール人たちが棲んでいた。そこでサピエンスたちが切り拓いていった道は、もちろん絹の道ではなかった。

その歴史において、エジプトやヨーロッパそしてアジアの諸地域とアラビア半島とを結ぶ道は、きわめて重要な意義をもっていた[15)]。アラビア半島の道は、出アフリカ後のサピエンスたちがアジア地域、そしてヨーロッパに広がってゆくときに通った道であった。その道はやがて、古代のメソポタミア文明やエジプト文明との結びつきをもたらす「文明に出会う道」となった。それらの道が発展してやがて恒常的な遠隔地交易の道として、「香料の道」となっていった。アラビア半島の道は、シバの女王の伝説にみられるようにユダヤ教の「教えの道」とも連なり、またイスラーム教が誕生してからは「巡礼の道」として重要な意義をもつ道ともなっていた。

---

15) 2018年に東博で開催された、東京国立博物館・サウジアラビア国家遺産観光庁・NHK・朝日新聞主催の「アラビアの道」展は、アラビア半島の道を、5つに分けて整理をしていた（同展図録『アラビアの道：サウジアラビアの至宝』参照）。すなわち、(1) 人類、アジアへの道、(2) 文明に出会う道、(3) 香料の道、(4) 巡礼の道、(5) 王国への道、である。アジア大環状文化圏とアラビア半島の道とは、関係ないように思われるかもしれない。だが、この文化圏の形成史を考えるとき、このような多様な性格をもつようになったアラビア半島の道は、アジア大環状文化圏が形成されるときの前提を形づくる道だったのであり、たいへん重要な意義をもっている。

インドとヨーロッパの関係においても、絹はそれなりに重要な意味をもちはした。しかし、もっと重要な意義をもつ商品が数多くあった。きわめて古い時代から、インドは宝石の産地として、エジプトやヨーロッパと深い繋がりをもっていた。インド産の香辛料の交易が、ヨーロッパ史においてきわめて重要な意義をもっていたことも、よく知られているとおりである。古代から、宝石や香辛料は、海路でも陸路でも重要な交易品であり続けた。海路においては、陶磁器もきわめて重要な文化的意義をもっていた。だから、中国とヨーロッパを結ぶ海路は「陶器の道」とよばれていた。茶の交易路も見落とせない。茶は近代史において決定的な重要性をもつといってよい商品となった。紅茶の起源やアメリカ独立革命の契機となった茶の歴史は、多くの人が知っていよう。ヨーロッパとインドと中国を結ぶ「茶の道」は、近代の三角貿易の重要な要素であった。

中国と中央アジアとヨーロッパとの結びつきにおいても、絹だけにとどまらない多様な製品がきわめて重要な商品となっていた。けれども、すでに論じてきたように、絹が重視されるようになる前の、はるか昔から、古代のメソポタミア文明やエジプト文明と中央アジアとは、ラピスラズリの交易などによって結びついていた。

中央アジアとの交易は、アラビア半島やインドとの交易をも介在させるかたちで、アナトリアや地中海周辺の交易を発展させた。ホメロスによって謳われたギリシアとトロイアとの戦争の遠因は、アラビア半島、インドそして中央アジアとの交易がトロイアの繁栄の基礎となっていたことにあった。宝石や貴石、香料や香辛料の交易は、古代のペルシア帝国の文明を形成し、発展させてゆく基礎ともなった。

子安貝は、ユーラシア大陸やアフリカ大陸にまで広がるきわめて範囲で、貨幣として使われ続けた。交換ないし交易を媒介する事実上の貨幣としてだけでなく、文化的にも大きな意義を担った[16)]。そうした基盤のうえに、のちにシ

---

16) 示唆するだけにとどめるが、子安貝は、貨幣として大きな意義を担っていたこともあって、目の表現としても用いられた。イェリコで形づくられた可能性の高いその造形は、シュリーマンが発掘したトロイアの黄金のマスクなどにも継承されていた。さ

ルクロードとよばれるようにもなった道は、交易圏とともに、文化的な結びつきをもたらすものとしても、大きな意味をもつようになっていった。

シルクロードが絹の交易で大きな意義をもつようになったからといって、それによって「香料の道」や「陶磁器の道」や「茶の道」の重要性が失われるわけではない。多様な交易品と交易を媒介する子安貝などの事実上の貨幣は、ユーラシア大陸とアフリカ大陸とを結びつけていた。その交易で用いられる事実上の貨幣もじつに多様であった。絹布も事実上の貨幣となった商品のひとつだったのであり、貨幣形態の多様性を見失ってはならない。それぞれの地域の特性に応じた多様な商品や事実上の貨幣は、多様な意義を担い続けていた。

すでに指摘したように、短距離の必需品交易の道は「婚姻の道」や「教えの道」として、商品の交換や物品の交易にとどまらない意義をもつようになっていた。アラビア半島の道などは、やがて、さまざまな遠隔地交易の道に、「巡礼の道」という宗教的な意義をも与えるようになっていった。交易路と宗教思想などの伝播との結びつきは仏教のような教えの道においても、留意しておかなければならない点のひとつである。

ヨーロッパと中国との交易を通じた結びつきにおいて、絹はたしかにきわめて重要な意義をもっていた。けれども、縷々記してきたように、絹だけが決定的に重要だったというわけではない。シルクロードという言葉の使い方をあまりに拡張してゆくならば、古代から連綿と続く各地な交易路とその文化的意義の理解を見失ってしまいかねない。言葉の使い方は、時代によって変化する。現代には現代の使い方や定義があってよいだろう。しかし、学術用語の場合には、時代や地域が異なれば異なった「道」の理解があるということをふまえた用語法が求められよう。

シルクロード認識は、ドイツ起源のものではあるけれども、日本人も中国人も、互いに協力しながら、その言葉の背後にある歴史を掘り下げてきた。その過程を同じ言葉の拡大解釈で終わらせるのではなく、長きにわたる協力関係を

らに、日本の遮光器土偶などの土偶の目の造形とも関連性をもっていた。

ふまえつつ、新しい方向で発展させるべき時期にきているのではなかろうか。これまでの日中あるいは中日のシルクロードをめぐる協力関係は、これからのアジア大環状文化圏を視野に入れた協力関係を発展させてゆく土台ともなる。単なる否定ではなく、発展史としてシルクロード研究の成果を活かしてゆく方向を模索すべき時期にきていよう。

アジア大環状文化圏を結ぶ道の独自性

シルクロードという呼称は、どうしても中国とローマを結ぶ遠隔地交易路に焦点をあてるものとなる。中国とヨーロッパを結ぶ遠隔地交易路に注目しすぎると、アジア大環状文化圏を結んでいた大小の交易路の重要な意義は見失われがちになろう。

すでに示唆してきたように、古代の交易路のなかでも、仏教の伝播のような「教えの道」を考えるとき、古代北インドのウッタラ・パーサは決定的に重要な意味をもっていた。北インドと中央アジアを結ぶ交易路は、独自の歴史的意義をもっていたのである。また、ペルシア帝国や中央アジアを介してメソポタミアやエジプトなどの西アジアやアフリカの文明地域を結ぶ交易路でもあった。

交易路としても重要な意義をもっていた道は、文化史的にみると、思想が伝播するとともに、変化してゆく道としての意義を認識する必要がある。たとえば、仏教は、現在のネパールのルンビニで生まれたシッダールタ太子が、やがてブッダとなって北インドの領域で教えを説いたことがその起源となっている。しかし、シッダールタ太子が生まれる前に、すでに過去仏と総称される先駆者たちがいた。彼らがいなければ、太子がブッダとして偉大な指導者になることもなかったであろう。

また、ブッダの教えがその弟子たちによって広い範囲に伝播してゆく過程で、仏教そのものに大きな変容が起こったことも明らかである。いま立ち入ることはしないが、僧院の形成においても、僧侶というある種の身分ないし階級が形成され広がってゆく過程において、かつてのペルシア帝国の東部や中央アジア、そしてチベットなどの地域は、きわめて重要な役割を果たしたといえ

る[17]。よく知られているように、大乗仏教や密教が形成されてゆくときに、これらの域の伝承や伝統は大きな影響を与えた。それらによって、当初の仏教は、大きな変容を余儀なくされた。中国や韓国や日本に仏教が伝えられたときには、すでに変容を遂げた仏教が伝播したのだということに留意しなければならない。

漢の武帝（在位前140 - 前87）が張騫（? - 前113）を西域に派遣し、その労多き旅程から戻ってきたとき、張騫は武帝に、大夏（バクトリア：現在のアフガニスタン）にいたときに、邛（現在の四川省）の竹の杖と蜀（現在の四川省）の錦の布を見たが、バクトリアの商人はそれらを身毒（インド）で買ったと言っていた、という報告をした[18]。この報告によって、それまで武帝たちが知らなかった「西南夷道」の存在が広い範囲で知られるようになった。

武帝たちは、この西南夷道をついに発見できなかった。しかし、この道が北インドの地と結びついており、さらにバクトリアのような中央アジアの地と結びついていたことは、広く知られていることである。この道は仏教がアジア大環状文化圏に広まってゆくとき、さらに中国や朝鮮半島や日本に伝わってゆくときにきわめて重要な役割を演じていたであろうことは、容易に推定できよう。

アジア大環状文化圏の確立と発展の過程を理解するためには、この幻の西南夷道が、北インドのウッタラ・バーサと繋がっていたことをふまえなければならない。その道はさらに、中央アジアのバクトリアにも繋がっており、チベット高原を介して、さらにモンゴル高原にまで続いていた。そのような道の総体がアジア

---

17) 現在、仏教と輪廻思想は切っても切れない関係となっている。しかし、ここでは示唆をしておくだけだが、輪廻思想はもともとのブッダの思想に含まれていたものではなく、輪廻思想とブッダの思想は異質のものだったと思われる。けれども、アジア大環状文化圏にブッダの思想が広がる過程で、仏教と輪廻思想は結びつき、一種のシンクレティズムが起こった。その結果として、輪廻思想を不可分の一部として組み込んだ仏教が中国仏教として定着し、朝鮮半島の仏教や日本の仏教に、そしてそれらの地域の仏教と結びついたさまざまな文化に影響を与えてきたのだといえよう。その過程の研究は、仏教の研究としても、アジア大環状文化圏における独自の思想形成過程の研究としても、重要な意義をもっているといえよう。

18) 『史記』や『漢書』に記されている張騫の報告については、数多くの書籍で紹介されている。ここで、正確な引用をしたり、出典をいちいち表記したりする必要はなかろう。

大環状文化圏を結びつけ、文化圏としての共通性を育くんでゆく基礎となった。その一部はシルクロードにも組み込まれたけれども、そこに組み込まれた道は、アジア大環状文化圏を形成していった道の部分的要素にとどまっていた。

このような商品として売買される物資の交易とともに、交易と結びついて広がっていった文化的な結びつきを視野に納めて、アジア大環状文化圏の歴史を考えることが、あらためて求められている。その探求はまた、サピエンス史そのものを再考することを求めるものとなっていよう。

小　括

アジア大環状文化圏の起源をたどってゆくと、出アフリカ後のサピエンスたちが中央アジアからさらに日本にまで到達した歴史の探求が求められるようになる。アジア大環状文化圏の歴史の基礎は、前近代の時代に形成された。では、近代になる前の時代に、どのようにして現在の中国の内周と外周に共通する文化圏は形づくられていったのであろうか。

その探求は厖大な歴史の探索を必要とする。環太平洋文化圏との絡み合いを考えることにまでなれば、南北のアメリカ大陸の歴史をふまえた地球規模のグローカルな歴史の全体を探索しなければならなくなる。したがって、ここではアジア大環状文化圏の起源の探求に課題を限定しなければならない。

とはいえ、アジア大環状文化圏の起源のみに探求を限定したとしても、生産様式や単一の国家権力によって統一されたことのないこれらの地域そして圏域は、いかにして一定の文化的な共通性と異なる民族間の共感をもちうる地域となりえたのだろうか。それを知るためには、このアジア大環状文化圏の起源に遡らなければならない。この文化圏が誕生する前提となる発生過程に遡って、その起源を探求してゆくことが求められる。そのためには、かなりの回り道をしなければならない。